

特別講演

脊椎圧迫骨折に対する椎体形成術の現状と課題

川 西 昌 浩

医仁会 武田総合病院 脳神経外科部長

骨粗鬆症を背景とする脊椎の圧迫骨折は大部分が、良性の経過をたどるが、保存的治療に抵抗した場合、背部痛によりADLを著しく低下させることになる。とりわけ高齢者では、疼痛とともに廃用性筋萎縮が原因でQOLを低下させてしまうことも多い。われわれは、2003年以降、通常の保存的加療に抵抗する圧迫骨折患者の除痛を目的に、椎体形成術といわれる、低侵襲治療を400例以上の患者に行ってきた。椎体形成術とは、罹患椎体を針穿刺し椎体内に医療用の骨セメントを注入し、疼痛を緩和する手技であり、欧米では1990年代より広く行われてきているが、本邦ではいまだ一般的には行われていない。本発表では椎体生成術の紹介と、2003年から実施してきた治療成績・限界点につき総括するとともに、2009年以降われわれが改良して行ってきた穿孔術とその成績を述べる。また2011年以降、保険適応となった風船を用いた椎体形成術（バルーンカイトフォプラスティ）についても、その短期成績を報告する。